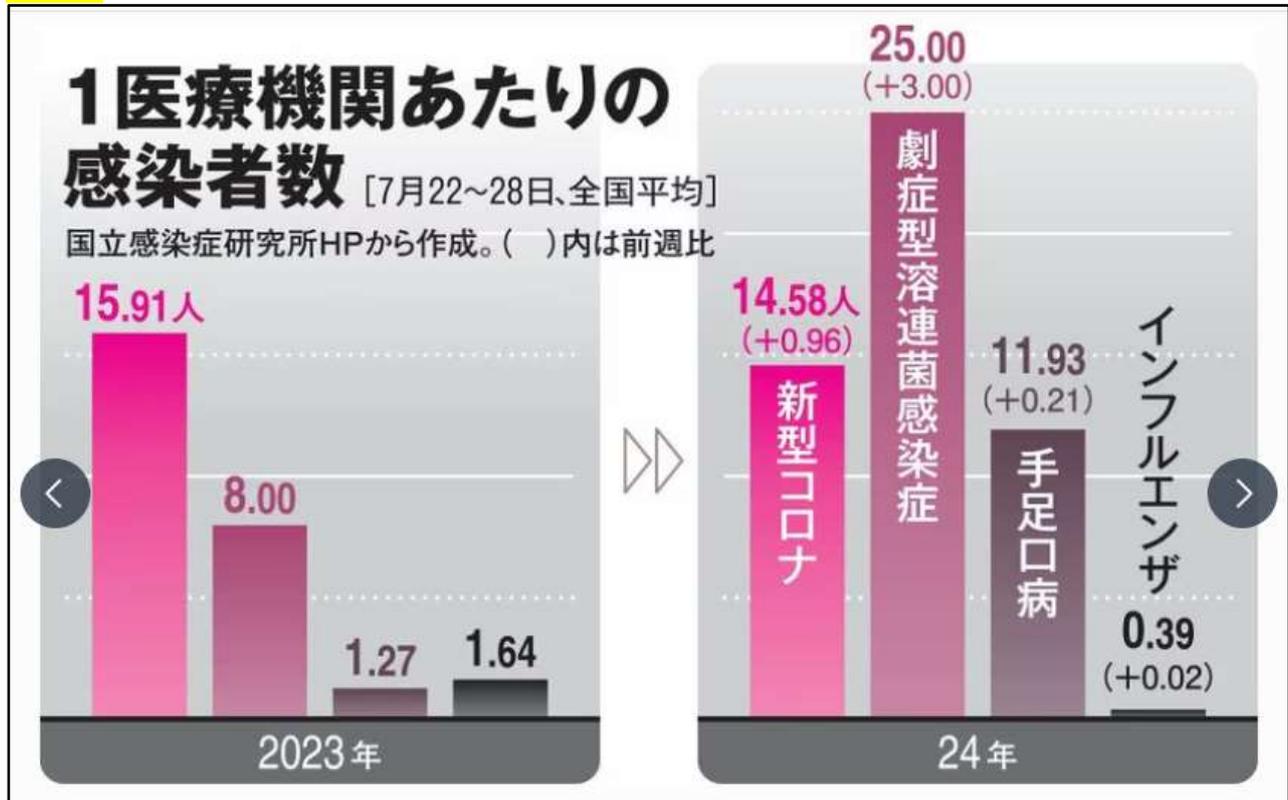


「コロナ11波」だけではない 劇症型溶連菌、手足口病、咽頭結膜熱、不気味な感染症
ラッシュ

8/26AERA

「コロナ11波」が到来中だ。他にも劇症型溶連菌、手足口病に加えて、咽頭結膜熱、通常は冬に流行するはずのインフルエンザまで感染者が増えている。AERA 2024年8月26日号より。



2日間で「恐らくコロナ」の話題が3件。東京都に住む40代の女性は「コロナ11波」を肌身に感じている。

7月17日には会食相手から「コロナっぽい。予定を延期してほしい」との連絡があった。翌18日は同僚から「熱中症と思って受診したらコロナ陽性」というLINE。その夜に食事をした友人からは「先週、高熱で寝込んでた」。

友人は高熱と喉の痛みがあり、以前感染した時と症状が似ていたため「恐らくコロナ」と自己判断し、自宅にこもっていた。熱は数日間で下がったが「体力が戻らず、階段を数段上るだけで息が切れる」と話していた。女性はマスクを電車や会社の中で再びつけ始めた。

東京都あきる野市で開業する「米山医院」の米山公啓院長は、「7月に入った辺りからコロナが増えていると実感しています」と話す。もともと高齢者の患者が中心だが「急な体調不良で来院してきた場合、半数ほどは、検査でコロナ陽性。デイサービスやお子さん、お孫さんからの感染が疑われるケースも珍しくありません」（米山院長）

■5類以降最大の流行

コロナ感染が広がっている。全国の定点医療機関当たりの新規感染者は7月末時点で12週連続で増加。現在は「第11波」とされ、昨夏の第9波を超えて5類感染症になって以降最大の流行になる可能性がある。さらに不気味なのが、コロナ以外の感染症の増加も見られることだ。

今、その急増ぶりが盛んに報じられているのが「劇症型溶連菌感染症」だ。国立感染症

研究所によると、2014年から19年まで感染者数は毎年増加し、コロナ禍の20～22年は減少したものの、23年に再び急増。過去最多の941人を記録した。今年はずでにその数を上回り、7月14日時点で1217人に達している。

溶連菌は健康な人の喉や皮膚にいる非常にありふれた常在菌で、呼吸器または皮膚の傷口などに侵入して感染症を引き起こす。子供がいる家庭なら「溶連菌感染症＝子供の病気」というイメージを持っているだろう。実際、溶連菌感染症は子供にとってはメジャーな病気で、一般的には喉に感染して咽頭炎を起こす。検査で溶連菌感染症と診断されれば抗菌薬が処方され、医師の指示通りに服用すれば速やかに軽快する。

■「人食いバクテリア」

だが“劇症型”とつくとも様相が変わってくる。「中部国際医療センター」（岐阜県）の杉山温人病院長が説明する。

「子供ではなく、大人に多い。最初こそ普通の風邪、普通の咽頭炎のようですが、急速に症状が悪化します。傷口から溶連菌が侵入した場合、ほんの小さな傷だったのが、ひどい痛みと腫れが生じ、高熱と意識障害が表れ、筋肉の壊死が起こり、肝臓や腎臓などの臓器が機能しなくなる。人によっては、これらの進行が24～48時間ということもあります」

致死率は30%。発症後数十時間で最悪の事態を迎えることもあることから、「人食いバクテリア」という異名もある。

「同じ溶連菌ですが、一方では感染しても無症状や咽頭炎の程度なのに、一方ではなぜ死に至るリスクのある劇症型溶連菌感染症を起こすのか。その理由ははっきりわかっていません」（杉山病院長）

手足口病の感染者数も過去10年で最多だ。例年は夏に流行するが、今シーズンはそれより早い5月中旬ごろから感染者数が全国的に増加している。

エンテロウイルス属のウイルスによって引き起こされる感染症で、5歳以下の乳幼児を中心に夏に流行する。口の中、手のひら、足の裏などに2～3ミリの水疱性の発疹ができ、発熱、食欲不振、喉の痛みなどの症状がある。まれに合併症として髄膜炎や脳炎を起こすことがあるが、比較的軽症で済む病気と考えていいだろう。

ただ、手足口病の流行は、親にとっては深刻だ。

「岡山県の幼稚園で手足口病で学級閉鎖となったというニュースをネットで見て、うちの子の保育園はどうかと不安で」と言うのは、神奈川県在住の女性。

7月9日、同県倉敷市の幼稚園の満4歳児クラスに通う17人中6人が手足口病や発熱・発疹などを訴え欠席。倉敷市は10日、学校保健安全法に基づいて、このクラスを学級閉鎖にした。

手足口病はワクチンはなく、特別な治療法はない。症状が消えてもウイルスが長期にわたって排泄されることがある。手足口病に罹患した際の登園については、園によって独自ルールが決められている場合もある。

「うちの子の保育園は、手足口病でも発熱や喉の痛み、下痢がなく、普段の食事ができるなら登園はOK。ただ、現時点でも発疹のたびに園から呼び出され仕事を抜け出さなければならぬのが大変。これで学級閉鎖になったら、どうすれば」（前出の神奈川県在住の女性）

他にも今夏、例年は冬に流行するインフルエンザ感染者も増えている。また、昨年は夏に子供たちの間で流行する咽頭結膜熱が冬になっても流行。「7週連続過去10年間で最多の状況（国立感染症研究所から、12月3日までの1週間の患者数）」という報道もあった。

（ライター・羽根田真智）※AERA 2024年8月26日号より抜粋